大学理事長に就任して

ずいそう

平成30（2018）年4月1日、駒澤大学理事長に就任することになった。そのニュースが学生時代の同期生や先輩、後輩に流れた途端、「おめでとう！」というお祝いの言葉と同時に「なんで理事長になったのか？」という疑問の声を投げられた。確かに、理事長に選任された私自身でさえも予期せぬ出来事であった。本学は私の母校であるだけでなく、曹洞宗の寺院に生まれた男兄弟4人全員の母校であり、さらに兄弟それぞれのお寺を継ぐ後継者の母校でもある。このようなことは、世の中においても滅多にないであろう。

駒澤大学の淵源を尋ねれば、427年前の文禄元年、関ヶ原の合戦以前の1592年に遡り、曹洞宗の学林として開設された深遠な歴史と伝統を誇る大学である。その大学の本部棟にある理事長室の席に座り、パソコンを叩いてこの原稿を執筆しているが、就任後、半年以上を経過した今でも「不思議だなあ！」と思うことがある。本学に隣接する駒沢オリンピック公園は、昭和39（1964）年の前回の東京五輪の時に造営された記念公園であるが、私が卒業後46年の時の流れの中で、公園内の樹木も随分大きくなった。大学への行き来のために公園内をよく歩くが、学生時代、合気道部に所属して厳しいトレーニングなどに汗を流したこの公園内を、この歳になって歩くことになろうとは、夢にも思わなかった。昨年の夏は、ことのほか暑さの厳しい日が続いたが、歩きながら「今鳴いている蝉の声は、往時と一緒なのかな？」「大学入学から約50年が経つが、時の流れは早いな！」などとセンチメンタルになることがある。

本学の建学の理念には、『仏教の教義、並びに曹洞宗立宗の精神に則り学校教育を行う』とあるが、中国は唐の時代の道林禅師の言葉である『諸悪莫作　衆善奉

行　自浄其意　是諸仏教』、つまり「諸々の悪い事をなさず、世の中の為になる事を行い、自らの心を浄らかにする、これが仏教である」という、このことを学生は行学一如の学校教育の中で修得してほしいと願う。

近年の世の中を見ると「自分さえよければ他人はどうなってもよい」「自分だけが幸せであれば世の中はどうなってもよい」という風潮が蔓延しているように思われる。反面、災害ボランティアなどの利他行に汗を流す人々のニュースに接すると、その姿に頭が下がる。前者のように、権利や金銭など物欲に生きるか、後者のように世の人々のために生きるか、それを選択するのはほかならぬ自分であり、限りある人生の死を迎えたとき、充実した気持ちであの世に赴くことができるのは後者の生き方をした人である。本学のキャッチフレーズに、『未来に繋がる自分へ繋げる』とある。仏教では《現在・過去・未来》の三世を説くが、現世のみの欲望に生きるのではなく、学生には未来につながる生涯を構築してほしいと念願する。

この一文が掲載されるのは平成31（2019）年1月号であるが、《外に平に内に成る》という願いを込めて命名された「平成」という年号とは裏腹に、この30年間は国内外においてさまざまな争いや悲惨な出来事が繰り返された。どれを見ても、人間の利権や貪欲によるものと思量する。本年5月には、30年ぶりに新しい年号に変わることになるが、冀（ねが）わくば国と国、民族と民族、人と人とが人間としてこの世に生命を享（う）けた喜びを実感し、互いに助け合って生きることのできる社会の実現および環境づくりに向けて、政を司る人が努力するよう期待したい。読者の皆様方のご健勝とご多幸を祈念する。

松原　道一●駒澤大学理事長